

保育内容「人間関係」の指導法に関する一考察

—幼児期の人間関係の形成に着目した事例の検討を通して—

岸 正寿 戸田 大樹 荒木 由紀子

要約

本稿は、幼児の年齢別における入園から卒園までの人間関係の形成過程を幼児の人間関係の視点、対人関係で育つもの、保育者のかかわりの視点から、効果的な指導法のあり方について事例を基に検討した。結果、①他者の存在に気付く②友達存在を知る③自己主張が先行する④自己主張が通らないことがあり、葛藤する⑤集団で過ごす充実感を感じる⑥友達を思いやる、相手の気持ちに立てるようになるという過程が示された。また、保育者のかかわりとして、支持的風土の雰囲気を作るのが幼児の豊かな人間関係の形成につながることを示唆された。

I. はじめに

子どもは人と人との間に生まれ、人と人との間で生まれ、育っていく。人が成長し、生きていくためには、人間関係が極めて重要な要因であり、子どもの成長発達には適切な人的環境が欠かせないであろう。近年、子どもたちの仲間集団の衰退や少子化、核家族化、都市化、情報化、国際化などの急激な変化を受けて、人々の価値観や生活様式が多様化している一方で、社会の傾向としては、人間関係の希薄化や地域における地縁的なつながりの希薄化、大人優先の社会風潮などの状況が見られるとの指摘がある¹⁾。そのような社会の中で、幼児期の豊かな人間関係の形成が求められている。また、幼児期からの子どもの成長の姿とそれにかかわる親や教師や大人たちの有り様を改めて私たちに鋭く問いかけているのではないだろうか。

幼児の人間関係については、幼稚園教育要領1989年の改訂で6領域から子どもの発達の側面から5領域に再編された時に領域「人間関係」が設けられた。幼児期の人間関係に焦点を当てたのは、人間関係が幼児期の発達にとって極めて重要な視座を与えるものであるからだとして示唆される。Vygotsky (1987) は、発達の最近接領域²⁾という概念を用いて、子どもは孤立した存在ではなく、大人や仲間といった意味のある他者との相互作用や援助を受けながら発達する存在であることを指摘している。

子どもは最初の人間関係である親子関係から人間としての信頼関係の基礎を学び、それを基にして、次第に自分の探索領域を広げていく。幼児期に入ると、幼稚園や保育所で初めて同年代の子どもとのかかわり合いや保育者との出会いから集団生活の基礎を学んでいく。また、幼児期は多くの子どもが集団生活を体験する時期であり、その集団生活の場の一つである幼稚園や保育所は、形式的・偶然的要素（年齢、地域など）によって組織された制度的集団である。齋藤(2000)は、幼稚園教育は幼児の主体性や自発性に基づいて行われ、その善さをそのまま伸ばしていこうという“合自然的”な側面と、教育とは文化や社会の持つ枠組みの中に子どもを組み込んでいく過程であるという考え方に表れられるような“合文化的”側面の2つの相反すると考えられる側面を持った営みであると指摘している。そして、教師の援助もこの2つの側面で常に揺れ動いており、教師は幼児との関係性、幼児の活動の姿、活動のねらいや内容など多様な要因の中で、自分の援助の在り方のバランスをとりながら、この2つの側面の統合を図っていると指摘している。

以上を踏まえ、幼児期の子どもに極めて重要である人間関係の形成に与える保育者の存在に着目した示唆的な事例研究は少ないため、保育者の適切な指導法についての検討が必要である。本稿は、幼児の年齢別における入園から卒園までの1年間の人間関係の形成の過程に着目し、幼児の人間関係の視点、対人関係で育つもの、保育者のかかわりの視点から幼児期の人間関係の形成に効果的な指導法のあり方について事例を基に検討することを目的とする。

Ⅱ. 幼児の人間関係の形成にかかわる保育者と子どもの関係

幼児の人間関係の形成にかかわる保育者と子どもの関係について、先行研究を通して検討してみたい。大場(1990)は「人とのかかわりと言いますと、家庭における父親・母親・兄弟との関係、幼稚園生活における教師や友達との関係がありますが、園生活についてはまず教師とのかかわりが重要で、この関係がしっかり成り立ってこなければ、全てが上手いかないということになります。教師との安定した関係があるからこそ、友達との関係が深まり、全ての人とのかかわりの育ちを可能にするという意味で、教師と子どもとの関係は幼稚園生活の根源をなすものと言えましょう」と指摘している。また、鯨岡(1997)は、コミュニケーションの中でも、気持ちの共有機能を求めるコミュニケーションを感性的コミュニケーションとし、原初的コミュニケーションがその基底となっていることを示した。原初的コミュニケーションとは、「主として対面する二者の間においてその心理的距離が近い時に、一方または双方が気持ちや感情の繋がりを共有しつつ、関係を取り結ぼうとする様々な営み」と説明している。またこの原初的コミュニケーションを支える二つの柱として「緊急希求性」と「自己充実欲求」をあげている。鯨岡はこうしたコミュニケーションのあり方を、特

に大人と子どもとの関係において明らかにしており、成熟した大人が子どもの行為を意味のあるものとして捉え、その場へ入り込み、更に子ども自身を意味ある世界へと巻き込んでいくといった行為によって両者のコミュニケーションは成り立っていることを指摘している。さらに、野尻(2000)は、幼児にとって相手と繋がるということの意味について、3歳児7か月の10か月間の観察記録から事例検討した結果、子ども同士の「繋がり」を成立させるためには、相手の思いを正しく理解する事、互いの求める充実感が満たされると了解されることが必要であることを指摘している。また、「繋がる」ための直接行動は、年齢が低いほど積極性、具体性がなければ相手に理解されにくいことを明らかにし、子ども同士のかかわりを深めるためには、養育者や保育者の適切な対応や援助が重要であることを指摘している。

吉村・田中・柴崎(2000)においては、3歳児を2年間にわたり保育観察と保育後の話し合いをもとに、事例を再構成した結果、保育の場における人間関係創出過程では、①他者との関わり合いを通してともに何かしようとする心情の形成、②相手の状況にふれる体験を通して、相手の状況に気付くこと、③保育者の細やかな配慮が目に見えないところでも常になされていることの重要性を指摘している。また、津守(1974)は保育者と子どもとの間に双方の心をつなぐ「見えない糸」があることを認めたように、人間関係には必ず空間的な「間」が介在し、その「間」を「見えない糸」がつかないことこそが、保育の場の教育的特殊性であることを指摘している。さらに、白川(2000)は、幼児の道徳性の芽生えと人間関係について、3年間にわたる実践研究を行った結果から、葛藤と挫折を幼児自らが乗り越えて人間関係を学んでいく姿と教師の指導のあり方を示している。3歳児は、自分の欲求や思いを十分に発揮できないで葛藤しており、教師は道具の取り合いが起らないように、一人ひとりの安心できる居場所を保証するように配慮していた。5歳児は、遊具の共有や片付けなどで他の幼児の思いや気持ちとぶつかりながら厳しく葛藤や挫折を乗り越える姿が見られたことを指摘している。これに加え、大森・友定(2000)は、4歳児男児の人間関係の変化と保育者のかかわりについて9か月の保育記録を用いて分析した結果、彼らの人間関係は、私たち大人から見ると不合理に満ちており、予想以上に複雑で思うようには変化してくれないことを指摘している。家庭で様々な人間関係を体験してきた子どもが初めて対等な人間関係を体験する幼稚園生活で、多くの感情体験をしながら、自分が見えてくることを指摘している。

以上のように、幼児の人間関係の形成に保育者が与える影響は非常に大きいことが明らかにされている。では、具体的にどのような保育者のかかわりが幼児の豊かな人間関係の形成に影響を及ぼすのであろうか。

Ⅲ. 実践を通じた観察の概要と分析方法

1) 研究対象

神奈川県内にある私立幼稚園（自由な保育を中心としている）の3、4、5歳児それぞれ3学級ずつの合計287名とその保育者。保育者は全学級で、担任が1名、副担任1名であった。

2) 観察期間

2016年4月～2017年3月までの間の週1～2回観察を行った（8月は除く）。合計54回。

3) 観察記録の収集

観察場面は登園から10時の朝礼までの好きな遊びを中心に、降園時までの幼児の姿とその保育者のかかわりを記録した。保育中にメモを取り、そのメモを基にエピソード記述を行った。

4) 分析方法

得られたエピソードの中から、年齢別における幼児の人間関係の育ちの実態について、年齢的な人間関係の発達の過程を明らかにすることを目的に事例を抽出した。事例の妥当性を評定者（大学講師）1名と討議し、17事例に決定した。また、それぞれの学期において1度ずつ担任に記録を見せながら個々の幼児や出来事についての見方を尋ねる形で面談を行った。

2. 観察事例

実際に筆者が観察した事例を基に、年齢別における幼児の人間関係の形成の過程と保育者の指導について考察していく。保育者のかかわりの部分については下線を引いた。

1) 3歳児の人間関係の育ち

事例1 2016年4月26日

S子が油粘土でお団子を作っている。その姿を遅れて登園してきたN子、Y子が眺めている。その様子をみた保育者が「N子ちゃんとY子ちゃんもお団子作りやる？」と聞くと二人は「うん」と答え、S子の姿を見ながらN子とY子が同じくお団子を作っている。その際に作ったものを見せあって笑っている。

<人間関係の視点>

自分の思いが相手に伝わる喜びを感じている。

<対人関係で育つもの>

一緒にいる楽しさ。同じものができた喜び。同じものを共有する喜び。同じものを作る喜びを感じている。

事例2 2016年6月27日

H男がI男に近づいて「何見てるの?」とそばに来る。I男は「かたつむりの赤ちゃん生まれたよ」と嬉しそうな様子である。二人は、「小さいね」「動いているね」と言って興味津々である。そのことを2人で保育者に報告しにいくと、保育者はとても感動した様子で「H男くんとI男くんが見つめてくれたの?」と聞く。H男は「I男くんが見つめた」と教えてくれた。その日からH男とI男はかたつむりの赤ちゃんと一緒に飼育するようになった。

<人間関係の視点>

友だちの気付きに共感する。

<対人関係で育つもの>

感動したことを伝える喜び。感動したことを表情や動きで伝える喜び。精神的な安定を得る。

事例3 2016年7月12日

Y男がジョーロを持って花壇に水をあげている。その様子を見たJ男が自分も水をあげたいとY男のもとにいき、ジョーロを取ろうとするとY男の持っていたジョーロが顔に当たる。J男は「ぶったー」と言って泣いている。Y男も「このひと、水かけた」と泣いている。保育者はY男とJ男が落ち着くように、二人をそれぞれ抱擁したあと、J男のおでこをさすりながらJ男の悲しい思いを受け止め、Y男の濡れた靴下を取り換える中でY男の思いも受けて止めていた。

<人間関係の視点>

互いにそれぞれの方法で不快感を出し合っている。

<対人関係の育ち>

友だちの存在がわかる。

事例4 2016年9月16日

W男が、運動会の練習で帽子を被ることを保育者から促されると、「黒色の帽子がいい」と言う。O子は、「うちのクラスは黄色だよ」と言って帽子を渡そうとする。W男は、「黒でないと嫌」と言って払いのける。O子はW男の顔をたたく。W男は「帽子なくてもいい」といって練習に加わる。その様子を見た

保育者が、O子に対して「教えてくれてありがとう」と言うと、O子は「うん」と言って練習に加わった。

<人間関係の視点>

思うようにならない状況の中で悔しさを感じる。

<対人関係で育つもの>

要求や願望を伝える方法を探る。思い通りにいかないことが分かる。ルールを理解しようとする。

事例5 2016年1月17日

A子が「クロッカス大きくなったね、育っているんだね」と言う。B子が「この前より大きくなったね」と話していると、T男が「育つってどういうこと?」と話しかける。A子は「大きくなるってこと」と言う。T男は「だってここより大きくなっているよね」と言い、クロッカスの育ちを見守る様子が見られた。

<人間関係の視点>

「育つ」ということについて自然を通して実感し、大きくなることと捉えて共感している。

<対人関係で育つもの>

発見したことの伝えあいを確認し自信を持つ。

事例6 2016年3月9日

D子は年長児が行っている氷鬼の遊びを見ている。年長児のK子から「やる?」と聞かれてルールを教わる。D子は「うん」と答えて一緒に氷鬼の遊びをする。

<人間関係の視点>

年長児のやさしさを感じ豊かに関わり合う。

<対人関係で育つもの>

異年齢児への信頼。

○3歳児まとめ

3歳児は幼児にとって初めての集団生活となる。家庭とは異なり、大勢の同年代の仲間がいて、保育者がいる。幼児は様々な体験を通して3歳児なりの人間関係を形成していく。事例を通して、3歳児の人間関係の形成について総括する。

事例1では、好きな遊びを行っているS子の姿を見て、N子とY子が一緒にお団

子を作り、その作ったものを見せ合って喜ぶ姿が観察された。その中で、保育者がS子とN子とY子のそれぞれの遊びをつなげる役割を果たしていた点が重要であろう。

事例2では、かたつむりの赤ちゃんを通して感動を共有する姿が観察された。保育者が感動した様子を示したことで、H男とI男に絆が生まれた事例である。また、その絆が飼育につながったと考えられる。幼児期の人間関係の形成に友達の気付きへの共感、喜びの共有は非常に重要なものである。

事例3では、幼児同士のトラブルに対して全身でその悔しい思いを受け止める保育者の姿が観察された。保育は身体行為であることが実証された事例であるといえよう。特に3歳児ではこのように、思うようにいかず悔しい思いをすることもしばしば見受けられる。そこで、葛藤を乗り越えていく時に保育者の温かなかわりが求められる。

事例4では、W男の強いこだわりに対してO子も主張し、O子がW男の顔をたたいてしまった事例が観察された。そこでも保育者は叩いたことを叱責するのではなく、「教えてくれてありがとう」と承認し、感謝していた。この保育者のかわりが自己主張できる風土を創りあげているのではないか。

事例5では、自然を通して、「育つ」ということを実感している姿が観察された。この時期では、物への興味・関心や好奇心が高まる時期であるため、幼児自身が体験して満足感を味わえるような環境構成が重要であることが示唆された。

事例6では、年長児が行っている遊びに関心を抱き、年長児からやさしく受け入れられる姿が観察された。子ども同士の中でも異年齢の関係というのは、養育者や保育者と違った大人と子どものタテの関係でもなく、同年代の子ども同士のヨコの関係でもなく、ナナメの関係である。そのナナメの関係性の中で受け入れられる体験は、他者への信頼へと繋がっていくのである。

3歳児の人間関係の形成過程をまとめると、以下の3点があげられる。

- ①自分とは異なる他者の存在に気付き、場の共有が始まる。
- ②友だちの存在を知り、模倣や一緒に行くことが始まるが、相手に上手く伝えられない。
- ③物への興味、状況への関心が高まっていく。

2) 4歳児の人間関係の育ち

事例7 2016年5月13日

E男はダンゴムシを集めている。T男が「水に入れよう」と提案すると、E男は「死んじゃうよ。かわいそうだよ」F男も「そうだよ、そうだよ。かわいそう」と言うが、J男は「悪い虫だから平気だよ」と言う。E男は「でも殺したらだめ、60歳になったら自然に死ぬから」と言う。

<人間関係の視点>

友だちの考えに対して共感したり、自分の意見を述べる。

<対人関係で育つもの>

生き物に対するやさしさ。生命の尊重を知る。情報の収集や思考の方法を知る。

事例8 2016年6月17日

ブーメランを作りたいというT男が、「セロテープを貸して」とU男に言うとU男が「いいよ」と言ってセロテープを貸す。T男は、保育者に対して「Uくんすごくいい人、すぐに貸してくれた。僕だったら後でねっていう」と感謝している様子が見られた。保育者はこのU男のかかわりとT男がそう感じたこと嬉しく思っていることを帰りの会で話すと、U男とT男はとても嬉しそうな様子であった。

<人間関係の視点>

友だちのやさしさを感じるとともに、自己の欲求や対応に対する気づき。

<対人関係で育つもの>

友だちの行為に対する感謝。友だちとの比較での自己の行動への認識。

事例9 2016年9月15日

A子から「今日は一緒に遊ばない」と言われてE子は落ち込んでいる様子が見られる。他の子と遊んでいるB子はA子に「そんなこと言ったらE子がかわいそうだよ」と言われ、A子は泣き出してしまった。そこで保育者は、B子と近くにいるE子とA子に聞こえるように「B子ちゃんはE子ちゃんがかわいそうだと思うのね。でもA子ちゃんも違う遊びがしたいのかもしれないね」と言う。

<人間関係の視点>

思うようにならない状況の中で悔しさや寂しさを感じる。他の幼児の思いやりと避難を感じ取っている。

<対人関係で育つこと>

自分を理解し、相手の気持ちを理解することの大切さ。友達への承認。

事例10 2016年11月11日

J男の泣き声が聞こえたのでM子はホールに行き、「どうしたの」と言いながら状況を見ている。J男は、K男とT男が「僕は、運転、僕は車掌」と言っている様子を見ながら大泣きしている。すると、M子が「Jくん、さみしかったんじゃないの。K男と仲良しだったから。3人で考えたら・・・」と

言うとK男が「だって運転手も車掌も決まっているんだもん。あとはお客さんだよ」と話している。

<人間関係の視点>

それぞれに違う考えを持っていることに気づく。

<対人関係で育つもの>

それぞれの思いの違いがあることを知る。仲介の難しさがわかる。

事例11 2016年1月13日

L子が積み木遊びをしているP子に「いれてー」と言うと、P子が「だめ」と言う。L子が「じゃあとなりに同じもの作ろうかな」といって作り始める。するとP子が「つなげよう」といって別々に作った積み木をつなげる。L子は「すごいのができたね」と喜んでいる。そこにC男がつなげた積み木を壊してしまった。積み木を壊されたL子が大泣きして、保育者に向かって「また、C男に壊された」と言うと、保育者が「今度はがっちりとした丈夫な壊れないものを作ろうよ」と励ますように言うと、P子とL子は再び積み木遊びを始め、以前よりも大きなものを作り上げ、満足している。

<人間関係の視点>

友だちに拒否され、相手や状況により対応しながら様々な思いに気づく。

<対人関係で育つもの>

二人の考えを合わせることで、より楽しく創造的に遊ぶ方法が生まれた。

事例12 2016年3月6日

R男が「サッカーやろう」とO男、Q男、V男に誘うと、4人が集まってきた。そこにQ男が「先生も一緒にやろう」と誘う。そこで保育者は、「G男くんも一緒にいいかしら？」と聞くと、皆が「いいよ」と言ってくれた。一緒に遊んでいたG男も加わり、3対3のサッカーが始まった。

<人間関係の視点>

教師や友達と触れ合い共に楽しさを感じている。

<対人関係で育つもの>

友だちに受け入れられる安心感。遊びに必要な技能。ルール、協力。

○4歳児まとめ

4歳児は、友だちとのつながりが深まる時期である。不安や葛藤の経験を通して自

制する心も育っていく。事例を通して、4歳児の人間関係の形成について総括する。

事例7では、ダンゴムシを通して自己主張をしあう姿が観察された。E男からは生き物を大事にする姿勢が伝わってくるが、お互いの主張をぶつけ合う経験が、今後の自制心や、自己抑制する力が育つので非常に重要である。

事例8では、物の貸し借りを通して、友だちがやさしく接してくれたことで、自己の欲求についての気付きがみられた様子が観察された。保育者のかかわりの中で、友だちのやさしさに気付いたT男のことを帰りの会で取り上げていることはとても興味深い。友だちからやさしくされる・やさしくする体験の両面を踏まえた指導のありかたであった。

事例9では、A子から「一緒に遊ばない」と拒否されて悲しむE子とそのE子に寄り添うB子の関係が観察された。この場面を見るとA子が「いじわるなことを言う子」というイメージがあるが、保育者が肯定的に子どもを捉えている声かけをすることで、A子の思いにも寄り添い、A子が自分の態度を見直せるきっかけを与えていることが推測された。この肯定的に子どもを捉える保育者のかかわりが、幼児の豊かな人間関係の形成を創るのである。

事例10では、それぞれが自分の気持ちを通そうとすることからいざこざが起きる様子が観察された。そうした葛藤の経験から友だちとかかわる楽しさや嬉しさ、悲しさや悔しさを実感することで子ども同士の人間関係が育っていくのである。

事例11では、一度は拒否されるが、隣で同じ遊びをすることから創造的な遊びに繋がった様子が観察された。積み木遊びのような自分で創り上げる遊びでは、周りに邪魔をされたくないで協同的な遊びに発展するのは珍しいが、相手への思いやりの気持ちが見られた事例である。ここでの保育者のかかわりは、壊したC男への叱責をすることが多いと予測されるが、ここで保育者は壊されたL子とP子に対してもっと丈夫なものを作ろうと提案するのである。このかかわりは日常から一人ひとりの子どもに向き合い、その子にとってどのような援助をしたら良いかを考えているからこそできる援助である。

事例12では、4歳児3月になり、3対3のグループで遊ぶ姿が観察された。4歳後半になるとルールを守って遊ぶことや、生活ができるようになってくる。しかし、遊びながらルールを柔軟に変えたりすることはできないため、教師がうまく間に入り、それぞれの思いを確認しながら遊びを進めていく対応が必要となる。

4歳児の人間関係の形成過程をまとめると、以下ようになる。

- ①友達と一緒に遊びたいが、自己主張もしたい。
- ②思うようにいかず葛藤することから学ぶ。
- ③相手への思いの気付きから人間関係の芽生えが見え始める。

3) 5歳児の人間関係の育ち

事例13 2016年5月18日

A男が、ドッジボールをやろうとB男、C男、D男、E男を誘い、仲間に加わるが、F男が加わりたようにじっと見ている様子を見た保育者が、「F男くんもやってみたそうだけど、ドッジボールってどういうルールだっけ?」と聞くと、A男がF男に細かくルールを教え、一緒に近くで励まし、当てられたときに外野に向かっていったF男に拍手をしている。一度ゲームが終わった後、F男から、再度ドッジボールをやろうと呼び掛ける姿が見られた。

<人間関係の視点>

友だちに受け入れられる安心感。遊びの面白さへの響き合い。友達へのやさしさへの気づき。

<対人関係で育つもの>

友だちと一緒に遊ぶ楽しさ。ルールの理解。友達のよさがわかる。

事例14 2016年7月5日

転入児のK男がプール活動の際に水に慣れていないのを見て、H男は、だまって手を差し伸べた。するとK男もだまって手を差し出しH男に体をあずけたところ、ふわっと水に浮いた。それを見た保育者が「H男くん、教え方うまいね」と言い、H男とK男は共に喜んでいる。

<人間関係の視点>

友だちの戸惑いに気づく。どうしたら浮くのか過去の経験からわかっており、それを友達に伝える。友達との支え合い。

<対人関係で育つもの>

助けてもらったり、教えてもらうことのぬくもりを感じる。友達のよさを認め、手を貸すことの喜び。自発性。

事例15 2016年9月15日

Y子は、誕生日のお祝いのバッチをつけているU子を見て「おめでとう」と言う。U子は嬉しそうに「ありがとう」と言いながら「Y子がお祝いしてくれた」と笑いながらT子に伝える。Y子は「よかったね、6歳だね」と喜んでいるのを見て、近くにいたX子も「おめでとう」と言う。

<人間関係の視点>

友だちの誕生日への気づき。友達を祝ってあげたり、祝ってもらう喜びを感じる。親しみを感じ合う。

<対人関係で育つもの>

友だちとともに喜び合える気持ちの良さ。存在感。成長の節目への自覚。

事例 16 2016年11月28日

T子とJ子が製作で折り紙をしている。T子が上手に折れずに失敗しているとJ子が「だめだなあ」と非難している。T子は下を向いて困った顔をし、黙っている。J子が「どうしよう」と困っていると、R子が「いいよ、大丈夫だよ、ちょっと貸してごらん」と言い、T子が困っている部分を教えてくれた。T子はR子見て安心した様子をしている。

<人間関係の視点>

仲間ですることの大切さと失敗した時の周りの友達の感情に気付く。相談することで考えたり、納得のいく解決ができることに気付く。

<対人関係で育つもの>

遊びの中にも責任があることが分かる。相談することの大切さ。許されることの安心感。

事例 17 2016年2月16日

Q子は、Z男から「ばか、ばか」と言われ泣き止まない。Z男は「謝りなよ」と周りの友だちから言われ、黙っている。30分ほど周りの友だちに慰めてもらい「もういいよ」と言う。しばらくしてZ男は「遊んでいるとき謝ってきた」と慰めてくれていたF子に伝える。それ以降、Q子とZ男は仲良く遊んでいて決して「ばか」とは言わなくなった。

<人間関係の視点>

友だちの悔しい気持ちがわかり、その気持ちを伝える。相手の心ない発言で悔しさや悲しさを感じる。相手が嫌がる言葉を書いてはいけないことに気付く。

<対人関係で育つもの>

相手が嫌がることをいったり、見逃したりしてはいけないことが分かる。相手の気持ちに立って考えることの大切さがわかる。言っていることと悪いことの判断力。

○5歳児まとめ

5歳児は、仲間意識が芽生え、仲間と目的を共有し始める時期である。集団として協同し、協力し合えるようになるのもこの時期の特徴である。事例を通して、5歳児

の人間関係の形成について総括する。

事例13では、ドッジボールを通して集団として遊ぶ姿が観察された。保育者は、やりたそうにしている自分から踏み出せないF男の姿から、その存在に気付けるように介入して、A男がF男の立場や視点に立って尊重するかかわりを引き出した。ルールのある遊びの中で、F男は自分を受け入れてもらい、楽しく遊ぶ中で人間関係が形成することができた。

事例14では、友だちの戸惑いに気付き、助けをもらう姿が観察された。5歳頃になると集団としての役割意識、周りの役に立ちたいという協同の意識が見られるのがこの時期の特徴である。その姿を保育者にほめられたことで自己肯定感を育むことができた。

事例15では、友だちの誕生日をお祝いしている姿を見て友だちとともに喜び合う姿が観察された。このように、相手の気持ちに立てるようになり、思いやりの言葉を話し、伝えられるようになるのが5歳児の姿である。

事例16では、仲間ですることの大切さや失敗している周りの友だちの様子に気付いた様子が観察された。自分と他の子との「できること・できないこと」の違いに気付いたり、そのことに協力したり助け合ったりすることで達成感や満足感を感じるようになる。

事例17では、相手の心ない発言に悔しさを感じ、相手の気持ちに立って考えることの大切さを感じる様子が観察された。5歳児後半になると、小学校以降の学習の基盤として重要な生活習慣の自立や人とやりとりをすることを中心とした学びに向かう力の育ちが見られる一方で、自分の考えを提案したり主張する際には、意見のぶつかり合いが生じることもあるが、自分の感情をコントロールできるようにもなる。

5歳児の人間関係の形成過程をまとめると、以下ようになる。

- ①仲間意識が芽生え、集団で過ごす充実感を感じる。
- ②友だちを思いやる心を持ち、問題解決ができるようになる。
- ③相手の気持ちに立てるようになる。

4) 3、4、5歳の事例から見えたこと

年齢別における幼児の人間関係の育ちについて、事例を通して検討した。年齢別に事例を考察したが、幼児の一人ひとりの姿から発達を見通して適切な援助をしていくことは重要であるが、その上で豊かな幼児の人間関係の形成には幼児の姿としての発達が行きつ戻りつするプロセスを大切にする保育者のまなざしが求められるのではない。幼児期は一人ひとりに応じる指導が命題である以上、「〇歳になれば、〇〇ができる」という年齢に沿った発達課題の内容に執着する考え方は危険であるとする。事例検討で明らかにされた幼児期の人間関係の形成の過程は、以下ようになる。

表 1 幼児期の人間関係の形成過程

① 他者の存在に気付く
② 友達存在を知る
③ 自己主張が先行する
④ 自己主張が通らないこともあり、葛藤する
⑤ 集団で過ごす充実感を感じる
⑥ 友達を思いやる、相手の気持ちに立てるようになる

この過程は、従来行われてきた人間関係の形成過程に通ずる結果であったといえるが、本研究の事例の独自性は、4歳児の事例11で見られたように、保育者のかかわりでいつも同じかかわりをするのではなく、一人ひとりの個性に応じて「受容する」だけでなく、幼児の遊びをさらに発展させる、日々の援助と違ったかかわりがあることを示していた。5歳児では、事例13で見られたように、ルールを保育者が教えるのではなく、子どもたちがルールを創り上げていく、教えていくというかかわりが幼児の人間関係の形成を促すかかわりであることを示していた。

保育者の存在で他者とかかわれるようになることもあれば、幼児自身が「自分」と「自分」がぶつかり合いながら葛藤する中で、子どもが自立に向かっていく事で豊かな人間関係の形成につながることを示唆された。

IV. 考察

本稿では、17の事例の場面を通して、入園から卒園までの幼児の人間関係の形成過程を明らかにした。幼児は、その過程で意味のある他者の存在に気づき、喜びや葛藤を乗り越えて、人間関係を形成していくことが示唆された。

年齢ごとの人間関係の形成過程を考察すると、3歳児では、①自分とは異なる他者の存在に気づき、場の共有が始まる②友だちの存在を知り、模倣や一緒に行うことが始まるが、相手に上手く伝えられない③物への興味、状況への関心が高まっていくことが明らかとなった。4歳児では、①友達と一緒に遊びたいが、自己主張もしたい②思うようにいかず葛藤することから学ぶ③相手への思いの気づきから人間関係の芽生えが見え始めることが明らかとなった。5歳児では、①仲間意識が芽生え、集団で過ごす充実感を感じる②友だちを思いやる心を持ち、問題解決ができるようになる③相手の気持ちに立てるようになることが明らかになった。

Mead (1990) は、「社会的自我論」のなかで、自我は自分自身に働きかけて自分の注意を引き起こすよりも先に、他者の注意によって意識的に引き起こされると指摘している。また、Cooley (1970) は、「自我形成理論」のなかで、自我は他者との関係の過程において自己の行動に対する他人の反応と、それによって引き起こされる自己

意識との相互作用の過程から形成されると指摘している。今回の事例の検討でも、他者の存在に気付き、他者との関係の中で自己意識が芽生えていく過程が確認された。Meadの「社会的自我論」とCooley「自我形成理論」の自己意識の発生の道筋が具体的保育場面において実証された。人間関係の形成というと他者との関係ばかりが取り上げられる傾向があるが、人間関係を形成するためには「わたし」という自分の存在を知ること、つまり「自分」と「自分」がぶつかり合う中でこと育まれていくのである。

また、保育者のかかわりに着目すると、保育者が温かい雰囲気を出することで幼児が伸び伸びと人間関係を築いていくことができることを読み取ることができた。

Gifb (1978) は好ましい集団全体の雰囲気を支持的風土 (Supportive climate) とし、その反対に最も警戒すべき雰囲気を防衛的風土 (Defensive climate) として二つに分け対照させて説明している。支持的風土とは、共有の問題解決態度、受容、感情移入、傾聴が生み出し、防衛的風土は検閲、防衛、説得、統制、処罰が生み出すものであると指摘している。Gifb が指摘したように、本研究でも保育者が子どもたちの姿をまず「受容」し、許容的な集団、人間関係の雰囲気をつくることを心がけ、子どもの側に立って、子どもの心の流れに沿い、その奥にある気持ちを理解しようと努めることで、子どもの心に解放感が生まれ、そこから子どもたちの自発的な行動が発動し、伸びやかな明るい集団、豊かな人間関係が形成されていくことが示唆された。集団あるいは保育室が開かれていると子どもの自己表現や遊びが促される。集団を信頼し、温かい人間関係に支えられて進んで自己を表現し、お互いの自己表現を認め合う集団となる。その支持的な風土を創り上げるには、保育者が幼児の完成に寄り添うかかわりが不可欠であると言える。

佐藤 (2015) は「21世紀型の教師は、「教える専門家」であるだけでなく、「学びの専門家」でなければならない」と指摘している。それは、「技術的熟達者 (technical expert)」から「反省的实践家 (reflective practitioner)」の転換を意味している。保育者の役割として、意図的な環境を構成し、知識や技能を教えるだけでなく、自らが「学びの専門家」としての実践の省察と熟考を通して学び続ける教師であることを意味しているのではないか。地域に自然発生的な子ども集団が形成されにくい現代において、幼児が初めて家庭の外で「人とかかわる」幼稚園や保育所はますます重要な役割を担うことになる。そのため、子どもの将来のより良い人間関係のために幼児期の人間関係作りはますます大切になっていくと考えられる。今後、保育内容「人間関係」に留まらず、さまざまなアプローチで人間関係に関する研究が行われていくことが望まれる。

V. 今後の課題

今後の課題としては、本研究では対象とした幼稚園の幼児と保育者以外の行動、もしくは他の園における保育ではどうなのかという点が挙げられる。保育者の経験年数や保育者の考え方、園の教育方針によって幼児へのかかわりは様々だと推測される。本研究の対象園は幼稚園教育要領の内容に準じた保育を行い、保育の特徴として一人ひとりの個性を尊重した教育を大切にしている園であったが、日本におけるすべての幼稚園が同様ではない。よって、本研究の結果が他の教師の行動を説明しえるものなのかは検討していく必要がある。また、エピソード記述によって簡単にあるがままの保育の営みを描き出せるわけではない。描き手の視点・枠組みを通しての意味になっている。言い換えれば、意味づけようとする描き手の枠組みが出来事の意味を構成しているのである。今後は、以上のことを踏まえた検討が必要だと考えている。

謝辞

本論文は、長期間にわたる保育観察を快く引き受けてくださった、当該幼稚園の園長先生、教職員の皆様、そして幼児たちのご協力があったて執筆することができました。心より御礼申し上げます。また、論文を執筆するにあたり、ご指導や貴重なご助言を頂きました聖徳大学児童学部教授小田豊先生に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 平成17年1月28日 中央教育審議会（答申）子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—【子どもの育ちの変化の社会的背景】を参照した。
- 2) 発達の最近接領域とは、ヴィゴツキーが子どもの発達に対して教育が寄与しうる領域として理論的に提唱した考えである。子どもが独力で問題解決にあたることのできる領域と、大人や他の有能な仲間との共同で問題解決にあたることのできる領域との差異のことである。この理論によって教育が発達を方向づけ、ある程度先導しうる可能性が示された。

引用・参考文献

- Cooley, C. H. (大橋 幸・菊池美代志編訳), 1970, 『社会組織論：拡大する意識の研究』, 青木書店.
- 鯨岡峻, 1997, 『原初的コミュニケーションの諸相』, ミネルヴァ書房, pp.45-67.
- Mead, G. H. (船津 衛・徳川直人編訳), 1990, 『社会的自我』, 恒星社厚生閣.
- 野尻裕子, 2000, 『幼児にとって相手と「繋がる」ということの意味 ―うまく「繋がる」ことのできない3歳児の一事例から―』, 保育学研究, 38(1), pp.20-27.
- 小田豊, 2001, 『新しい時代を拓く幼児教育学入門 ―幼児期にふさわしい教育の実現を求めて―』, 東洋館出版社.
- 大場牧夫, 1990, 『人間関係』, ひかりのくに株式会社, p.4.
- 大森洋子・友定啓子, 2000, 「4歳男児の人間関係の変化と保育者のかかわり」, 保育学研究, 38(1), pp.69-76.
- 大塚忠剛, 1977, 『支持的風土づくり』 黎明書房
- 齋藤正典, 2000, 「教師と幼児の関係性の中での教師の援助の変容」, 保育学研究, 38(1), pp.77-84.
- 佐藤学, 2015, 『専門家として教師を育てる ―教師教育改革のグランドデザイン』, 岩波書店.
- 白川蓉子, 2000, 「幼稚園における幼児の道德性の芽生えと人間関係―神戸大学発達科学日付属幼稚園の実践研究の検討をとおして―」, 保育学研究, 38(1), pp.53-60.
- 津守真ほか, 1974, 『人間現象としての保育研究』, 光生館, pp.148-153.
- 吉村香・田中三保子・柴崎正行, 2000, 『保育における人間関係創出過程 ―「間」と「間合い」に着目して―』, 保育学研究, 38(1), pp.36-44.
- Vygotsky, L. S., 1987, Thinking and speech, in R. W. Rieber and A. S. Carton (Eds), The collected works of L. S. Vygotsky; Volume 1 Problem of General Psychology, Plenum Press.

資料 2017年改訂 幼稚園教育要領 領域「人間関係」ねらいと内容

人間関係

〔他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。〕

1 ねらい

- (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動する事の充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、関りを深め工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ。
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

2 内容

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友だちと積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達との関りを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみを持つ。

A Study of Pedagogy of “Human Relationship” in the Early Childhood Care and Education Setting

— Case Studies of Formation of Human Relations among Young Children —

Masatoshi KISHI Daiki TODA Yukiko ARAKI

The study explored the processes of development of human relationship among young children from their entry period to graduation time at kindergarten. We, the researchers of the study, employed the case studies to depict and analyzed the ways of the children to develop their human relationship, and pedagogy of teachers. In terms of interpretation of the children's actions, we focused them from three perspectives; 1) peer relationship emerged among the children, 2) characteristics of development of human relationship, and 3) interactions between the children and their teachers. The study revealed that the processes of development of human relationship were identified as follows; 1) being aware of others, 2) acknowledging the others as friends, 3) expressing one's perspectives to others, 4) experiencing conflict, 5) feeling of sense of belongings, and 6) caring and empathizing others. In terms of pedagogy of teachers for promoting the children's human relationship, creating an environment with supportive atmosphere was considered as important.